武家名目抄稿

居如部

廿五

和書門
類 二五二の六 號
函 七七
架 八
冊 四四九 四五六

内閣文庫
和書
類 二五二〇六 號
冊 四五六
函 一五二
架 一一

内閣文庫
舊號 和 25206
冊數 457 (164)
函號 153 275

Kodak Gray Scale
© Kodak, 2007 TM: Kodak
X-rite ColorChecker
MSCCPP000411

国立公文書館
National Archives of Japan

武家名目抄稿第廿九

居處部廿四　五冊

大手

搦手

虎口

城戸

大城戸

一城戸

国立公文書館
National Archives of Japan

二城戸
三城戸
詰城戸
一門
二門 今无
三門
詰門
二階門

黒門
黒鐵門
埋門
廊下門
上鎖門
透門
篭門
柵門

国立公文書館
National Archives of Japan

冠木城戸
揚城戸
揚簀戸
釘戸
柵戸張
大戸張
小戸張
門隠

国立公文書館
National Archives of Japan

辻馬出
見付

武家名目抄稿第廿五冊
居處部廿四

大手

平家物語云（四・八三ヲ）大衆揃條 足ゝ原ハ白川乃左家に火をゝけ焼上ゑ在京人六波羅地武士ともあハやゑゆてきしゝ堂て馳むかいん すゝん其時岩伝橋ゑ地ゑひゝけ〳〵ゑハしゝゑて防闘ゝん

まゝ大ぜい松仮をかり伊豆守を大將軍と
して若大衆悪僧ども六波羅にをよ
せ風うつゝ火かを焼上一もこもりてせめ
んなとか太改入道焼おひゝ討さるへ
きとそ金儀ちとりかる
吾妻鏡云治承四年八月廿六日丙午今日
卯刻此事風聞于三浦之間一族悉以引籠
于當所衣笠城各張陣東木戸口秋次郎義
澄十郎義連西木戸和田太郎義盛金田大
夫頼次中陣長江太郎義景太多和三郎義
久等也
太平記云師賢登山條両六波羅大ニ驚テ先内
裏ハ参テ見奉ルニ主上ハ御坐無テ只局
町女房達此彼ニサワトヒテ泣聲ハミ
ソシタリケルサテハ山門ヘ落サセ給タ
ル事子細ナシ勢ツカ又前ニ山門ヲ攻ヨ

トテ四十八箇所ノ籌ニ幾内五箇國ノ勢
ヲ差添テ五千餘騎追手ノ寄手トメ赤山
ノ麓下松ノ邊ヘ指向フル搦手ヘハ佐々
木三郎判官時信（下姓名略）美濃尾張丹波但馬
ノ勢ヲサシソヘテ七千餘騎大津松本ヲ
経テ唐崎ノ松ノ邊マテ寄懸タリ
又云大館左馬助討死條篠塚伊賀守一人ハ大手ノ
一二ノ木戸無殘押開テ只一人ノ三タリ

ケル
をかたち草紙云御示の下ハ近手ハ来
見物をみさらさ三騎ハ手ハ
ハ三ツ池尾ノ三郎左衛門ひろ
ひろ備前の平四郎以上五騎ハ手ひつさう
弁慶ハうき部者ハ

新撰長禄寛正記云政長勢神南山ヘ押寄
スル大手ハ遊佐次郎左衛門筒順順與南
ハ神保宗次郎兄弟古市畠尾西ヲ態ト明
ラル是ハ此ノ口ヨリ敵ヲ落ハ落サシ
トノ謀也

會津陣物語云一番ニ大將濱田治部手鑓
提テ追来ル中目大學山川帶刀木村隼人
ラシワイテ追来門ヲ立サセス付入ニ
セヨトニノ丸大手門ヘ懸入ケリ

松原自休手録云太津ノ攻手從去七日稠
ク圍之九月十四日從長等山打大筒從海
陸攻寄破出九欲入大手ノ門由井助左衛
門等閉門堅ク防之

奥羽永慶軍記云谷地寒河江落城條山形ノ先手氏
江尾張守カ者氏三千余人討レケルサレ
氏氏江氣ヲ屈セスアトヱハ引入イヨヽ

く進ンテ攻タリケリ勘十郎是ヲ見テ今
ハタマリカネ子氏江カソナヘノ未崩サル
ハ味方ノ不覺ナニテコソアレサラハ我
ラシヤラレ迚川原毛ナル馬ノ七寸ニアア
マルニ打ノリ例ノ大長カナヒウサケ我
ニ劣テヌ兵三拾騎大手ノ城戸ヲ押ヒラ
キ乘ウケテ切テ出ル山内首藤人數
續撰清四記云主計頭ハもくに志波のこ
ゐと〳〵舟伐つき鉄炮をおうけ迚も出さる
侍ども討さを〳〵心ゆけよをし上き迚も
門の向なるそけ山ようをとふ小西陣
ゐへ集〳〵城さを見る陣義をおく
築城記云迚も口ハ土橋可然也自然板
そ〳〵なとハ火伐付る事アルヤ切テ出てよ
敵方を土そ〳〵よ北るや
增補家忠日記云享祿三年清康君軍ヲ引

テ三州宇利ノ城ヲ攻撃玉フ松平内膳正
信定松平右京亮親次ヲ以テ大手ノ首将
トシテ清康君ハ城ヨリ後ノ山ニ陣シ玉
フ城主熊谷武功ノ軍士タルニ依テ其攻
ヲ不侍シテ速ニ大手ノ城門ヲ開テ進ム
出勇ヲ奪テ拒キ戰フ
又云慶長五年八月廿三日川瀬左馬助瑞
龍寺ノ砦ヲ弃テ岐阜ノ城本丸ニ敗レ入
テ黄門秀信上所ニ加ル大手七曲口ニシ
テ木造左衛門佐津田藤兵衛其子藤三郎
百々越前守等蹈留リ坂中ニ於テ奮戰フ
搦手
吾妻鏡云文治五年八月十日丁酉去夜小
山七郎朝光吳宇都宮左衛門尉朝経郎従
紀権守波賀次郎大友已下七人以安藤次
為山案内者面々負甲疋馬密々出御館自

伊達郡藤田宿向會津之方越于土湯之嵩
鳥取越峯攀登于大木戸上國衡後陣之山
發時聲飛箭此間城中大騒動称搦手襲来
由國平衡己下邊將無益于構塞失力于廻謀
忽以逃亡

又云嘉禎元年九月十日長尾三郎兵衛尉
光景建暦三年義盛反逆之時雖為十三歳
小童向于北御門搦手勵防戦矢多彼射立

于腹巻云々

太平記云山門ノ大衆ハ二萬餘人大略徒
立ナリケレハ如意越ヲ搦手ニ廻リ時ノ
聲ヲ揚ケハ同時ニ落合ヒ鳴ヲ静メ
テ待明ス

をかたち草紙云よりたけひろ所ふ一とき
にきゝ〳〵ゝさきとるものやされもあり
にゝたき所返事まてゝゝ男ゝたゝ

あゝにきよせ金しをよをかぶめをと二を
にわをぬ事あらゝしみかさハたゝひ無勢
ゐゝとも是ゆゝらんにむらゝつとくいゝさハ
花をちらそ角〳〵

賀越闘諍記云（江沼郡三城落去條）越前勢一千餘騎
時ヲ作リ鍬ヲソロエテ攻上ル城中ニモ
爰ヲセントニ攻戦矢レ共物トモセス手
負ヲノリ越息ヲモウカセス責入ケル間
城ノ大将叶マレトヤ思ヒケン搦手ノ木
戸ヲ開テ高塚振橋ヲ指テソ引ニケル

築城記云カラメノ口ハケ橋もくるゝ
ゝ仏ゆゝ祢ゝるゝ
又云是ハ大を共歌ワリ時ハ搦手ゑ切て
出るゆゝよ可拵也
按城郭乃前面を大手といひ後面を搦手
とゝ大を是と書るの左平記ゝ

見えうり迹をハオヒテとう木ツテとう
讀ムきをオウテと讀ハ穩當なるあふる
上ゐ大をとハ俗名もたうひうれと掛を
の字ゐ對て迹をと書るうやあうんゐ
大を掛をとハ少異ハいまゝ佳ゐうを俗
てゆゑて城郭の前面ハ制も嚴うゐ構も
大なるかうゐ大をとゆゑ猶笑亀乃西つを
大門とゆゑの歌ゐうを海を山の手

なとゆゑをおて方ハ北輪俗ゐう又葦ゐ
歌ゐと紳ひゐ書こるをゆゑ葦の葉の錦を羹宏乃錦の形を学
なひきたる形ゐ似うれたりやう
て彩形て焼
ゐるをゆゑ なとゆゑハ形ゐ方と形と変ハ
吳るれとカタ乃テ比なるハ一例ゐカタのカハ
上の俗の歌きに葉りて者のれ
タの国内乃テゐ後りたるゐ掛手をゆゑ変ハ
掛ハ拾うとゆゑんうをく曲輪乃拾り地
方ゐる故掛をとゆゑるやゆゑ谷川士清う
日本紀通俗ゐ神武紀の男軍女軍

を男子の軍ヲ以後世ハ其を大
子猶子とゝ[illegible]と[illegible]る奇説と[illegible]

虎口

長禄記云 義就於嶽山籠城条 寛弘寺ノ軍勢皆々
嶽山ノ際へ取倚野陣也同廿七日城衆打
出伊勢ノ國衆ノ陣へ寄セ太刀打長野勢
数多被討河内ノ衆ニハ大方新兵衛尉同
彦左衛門尉花田宗左衛門尉サヽヲノ虎口

ニテ討死

應仁私記云敵味方押分テ牛角屋角構要害ニ
中略 去間随分限所々拘陣口攻口詰口出張
口籠口木口

籾井日記云信長卿秀治宗貞ニ御對面條 天正七年己卯
三月八日國司屋形秀治公摂津國ヘ御進
發ニテ候將軍ト和談調ヒ荒木村重退治
ノ催促ノ候又將軍父子ヘ御對面アル処

ニ候先ハ國中御仕置等虎口押ヘノ次第
諸方ノ手合セ等丈夫ニ御評議ノ候東口
三田口ハ定押ヘノ外ニ加番モ増テ候又
ハ入カハラレタルモ多ク候
由良家傳記云桐生御城虎口御縄張被成
及石垣奉行ニ金井出雲守ヲ被仰付成
繁公ハ高矢倉ヲ被成御座御差図被仰付
及云々

又云新田由良家傳記藤生紀伊守言上條御城ヲ取出御要
害以下の虎口堀屏何モ〻〻御勘被成
可仕仰付ヲ云々
松原自休手録云古田兵部モ従東國ニ
入松坂ノ城雖然歟未寄来依之割微勢侍
十餘輩交軽卒津城南ノ口ヲ持ツ中略井上
清右衛門ハ紛居城中翌日提首出従城稠
ク發矢石依之敵退虎口

按城郭陣営の危要會ある處を猛虎乃
歯牙はたとつく虎口といふあり

城戸

奥州後三年記云武ゐかさ迄てまた光
りいまゝ御身あるゝ時ふ者ゝ
ハらるゝき御津ゐひ一人と侍ておもふ事
まゝ〳〵ゝ(云)ゐかゝと光ちゝ
とゝの中ふ雑ゐ中ゐんすゐと云ゐ姫

これ事方ゝそ因ゐめ空きゐ(こ)ゐ
事ゐ城やるはゐ色虎ゐあ城ふ中ん
のゐゐ因城寿て左力ゐりをゐ紀ゐ城(お)
戸ゐ〳〵めてひゐきてわつゐふ人ゐゐ城
いゐ虎中ふ津ゐゐのかきのゐくふたち並
源平盛衰記云一谷城構條平家ハ讃岐國屋嶋
ヲハ漕出テ、摂津國ト播磨トノ堺ト難
波潟(潟)一ノ谷ニソ籠リケル去正月ヨリ此

レ能所ナリトテ城塁構タリ東ハ生田ノ
森ヲ木戸口トシ西ハ一谷ヲ城戸口トス
吾妻鏡云壽永三年二月七日丙寅武藏國
住人熊谷次郎直實平山武者所季重等卯
刻偷廻于一谷之前路自海道競襲于館際
為源氏先陣之由高聲名謁間飛驒三郎右
衛門尉景綱越中次郎兵衛尉盛次上総五
郎兵衛尉忠光悪七兵衛尉景清等引廿三
騎開木戸相戰之
又云文治五年八月九日丙申入夜明旦越
阿津賀志山可遂合戰之由被定之爰三浦
平六義村葛西三郎清重工藤小次郎行光
同三郎裕光將野五郎親光藤澤次郎清近
河村千鶴丸年十三以上七騎潛馳過畠山次
郎之陣越此山欲進先登中略七騎終夜越峯
嶺遂馳著木戸口各名謁之処泰衡郎從下部

伴藤八己下強兵攻戰此間工藤小次郎行
光先登狩野工藤五郎損命伴藤八者六郡
第一強力者也行光相戰両人並轡取合暫
雖争死生遂為行光被誅行光取彼頭付差
木戸登之処勇士二騎離馬取合行光見之
廻轡問其名字藤澤次郎清近欲取敵之由
称之云々
梅松論云細川北人々あとゝ〻峯に八日も
ゝを流川原を下に南へ出ゝ有とに
後市田は完固しゝる敵とも市田縄を地小
靏を塞ぎ竹を井切て廉屋を拵ゝ市
城戸を立て相待候大勢抑ゝ寄処に
四方地中ゝ二町先立て武者二騎馳て
無しゝ櫓をく成て異馬を乗る者共先
ゝ馬成きつとすくて抜きたゝ者共刀をさゝ
ゝ方々を切落て櫓の下北城戸のかゝ

ヽをおゆさきヽと取ほて馬ニ乗あすゝ書き
ゝ云ゆをかゝゝぬけヽ処ニ欲ハらゝしを
おゆきまゝと取付てありおゝ
由をゝゝ云村名老おてに東武士とも雪かき
ゝゝきをゝを多なるひきのあるゝヽきこ
ゝ者をゝさきくのもいこしゝおあヽさを
くもとゝまをいゝけをゝきやまゝかゝき
ゝゝあるをえもゝをおゝさゝをき

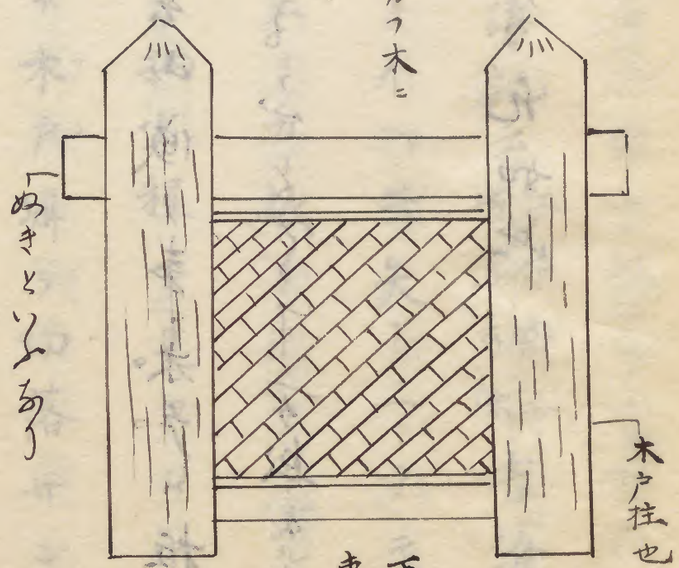
いヽ由ゝあとゝゝ事ともゝゝめゝる
太平記云阿新殿條本間三郎カ一ノ太カニ宵
ヲ通サレテアツト云聲ニ番衆ニ驚騒テ
火ヲ燃メ是ヲ見ニ血ノ付タル千イサキ
足跡アリサテハ阿新殿ノシワサ也堀ノ
水深ケレハ水戸ヨリ外ヘハヨモ出ンサ
カシ出テ打殺セヒ手ニ松明ヲトホシ木
ノ下草ノ陰マテ殘處無クサカシケル

又云（京軍條）氏範小牧五郎左衛門ヲカヒ廻
テ城戸ノ内ヘ投入五尺七寸ノ太刀ノ鐔
本取延テ只一騎返合
文正記云大路小路城門々々櫓々掟於役
人屋於警固
官地論云役城中武者一騎出来（中略）舍人男
楯計挾脇開木戸堀板橋静ニ歩出敵陣近
掛寄鐙踏張通ス上大音聲名乗是本郷修
理進春親云々
簒輪軍記云信玄ハ一番ヨリ千余の軍兵
伐引具して城の四方秋囲ヲ持楯ヲ立大
多勢ニ免て揉合息を傳を責ヨ寄城
中より強弩共門を閉き鎗を構へ一度ニ
喧と控出る形勢は宛ヨ秋風の万り城を
吹ちらす也甲軍早引退味方乃城戸を
閉て英氣を助ケ暫く息を休ム岩怪如

神

賀越闘諍記云江沼郡三城落去條吉澄腹ヲ立是程
ニ名乗トイヘ共矢ノ一ツモ射出サヌハ
臆病ノ至リカ歟ヲアナトルカ不テ其儀
ナテハ手柄ノ程ヲ見セントテ馬ヨリ飛
テ下リテ木戸堺ヲ切落サントシケル間
潟
潟山津ノ大助十騎計木戸ヲ開テ切テ出
北畠景憲家譜云三ヶ条之返答景憲先一

ニ淀ニ木戸を被成番手ハ花ヶ丘二字
佐川石山之前猿飛あとの道筋ハ穿鑿
ハ花ニ成
築城記云山城ノ事木戸ハ柱ヲ七尺柱ハ
いらかともふとくして丈五寸法ハ不可有
之也
木戸ハ凡如此



一カイ有木ヲ十六角ハくりまケリかく
ぬんの木とそれ内ますさす横ニ木ヲ渡ス

也ニヲリ内へ明ル也斤ヒラキハ左ノ開也」
又云平城ホ戸。の柱ノ口ノ廣さ九尺ハ方
長ハ土の上一尺五寸一方ニ一本ヲ方ニ二
大本ノ柱ハ面ヲ廣四角に作りて可立地ハ
いろ不とヒ除くハ入くゝり地クミリホ戸。
ハ右ノ方ハ有へし
按城ノ城戸皆キトと横ノ戸ノ城を
キといひしと又本戸とも書ハ延喜を

延未参儀ヲ云未なと書の例ヲて字刂
を俗名ヲ用ふるなり然るを近世未ヲの字
ヲ泥そつの義略なるものをいふを
なれり

大戚戸

九、三ナオ
吾妻鏡云文治五年八月八日乙未秀綱等
雖相防之大軍襲重攻責之間及已刱賊徒
退散秀綱馳歸于大木戸告合戦敗北之由
於大將軍國衡
新撰長禄寛正記云急トスレト山中ニマ
ヨヒ支夜無程明方ニ漸々弘川ノ陣ヘ馳
付テミレハ三重ニ大木戸ヲ打高矢倉ヲ
上タリ

一城戸

太平記云船上合戦條隱岐判官ハ猶加様ノ事
ヲモ不知搦手ノ勢ハ定テ今ハ責近キヌ

ラント心得テ一ノ木戸口ニ支テ荒手ヲ
入替々々時移ルマテソ責タリケル
又云（三、上オ）笠置軍條 城中鳴（鳴）ヲ静メテ人アリトモ見
ヘサリケレハ歌ハヤ落タリト心得テ四
方ノ寄手七萬五千餘騎堀カケトモ不謂
葛カツラニ取付テ岩ノ上ヲ傳テ一ノ木
戸口ノ邊ニ王堂ノ前マテソ寄タリケル
大友真蔡記云（十九）星河乃城 佐伯乃あしかる
鉄炮をすかへ（さ）せめ寄て時刻をうつ
もとすかる城中より七八百人一乃木戸
を引しき谷をさへいを称をはらひおと
鉄を合を有り

二城戸

長門本平家物語云 重衡南都發向条 十二月廿八日
重衡北朝臣南都へ發向す三千ばかりを二
手にわけて奈良坂般若寺へむかふ大衆

うちうちあるぬをきつらひきれ共
三ようき北軍兵馬上をくさうんとよりけ
りをきハ二北成ノ口ほとあるや
ぬきをけり

太平記云（十六、廿四オ）將軍御進發大渡山崎等合戦條　頼玄彌カヲ得
テ櫓ノ下ヘカウキ入堀立タル柱ヲ五イ
ヤ〻〻ト引ニ橋ノ上ニカイメル櫓ナ
レハ橋共ニ上ルキ渡テスハヤ上リ倒レ
ヌト見ヘタリケル櫓ノ上ナル射手共四
五十人叶ハレト思ヒケン飛下〻〻倒
レフタメ井テニノ木戸ノ内ヘ逃入ケレ
ハ寄手數十萬騎同音ニ箙ヲ敲テソ笑ケ
ル

萬松院殿完太記云六月廿四日の朝旁の
多之ほとり三百余騎大ぢ〻さ〻にれ子
とり找ハあるとき〻あ一枚たてをほきと

見て之を城に押寄せ一二町ばかり
下りまで打て出の戦ひ大なる
未戸逆義朱を引やめ二の未戸逆に寄
せ付たる
江隈記云尼子戦条合元就方より郡山右山口
七口に道ふさせり合戦不果内右
ふく毛利元勝軍ありて毛利元就是おき
ひ自之を奇騎ヲ尼子の本陣青山

へ逆ヲ下し二の未戸まで責入ると尼
子方にて諸所刑戸右夫ヲ引退之沢と云も
の切て出毛利元を遠く押捕ル
三城戸
太平記云金崎城ハ昔係ハサヤサラハトテモ死
ナンスル命ヲ若ヤト寄手ノ大将ノアタ
リヘ給レ寄テヨカレスル歌ト俱ニ差違
ヘテ死ナレトテ五十餘人ノ兵共三ノ未

戸ヲ同時ニ打出責口一方ノ寄手三千餘
人ヲ追巻リ其敵ニ相交テ高越後守カ陣
ヘソ近付ケル
嘉吉物語云京勢の中ちをを石見勢七百
三条騎かめきさんてかゝをけるうちてふ
一二此本戸をうちやぶりこの本戸きて
面をあらすかゝくいるん
矢嶋十二改記云天正九年乙酉月ハ仁賀保
三百姓ども加ゝ通を引仕りて仁賀保へ攻入
三ノ木戸迄責入ハ然処又本宮陣道並及
ゐ吉及後陣ゐ成り西へ古陣ハ引取ゐ成ル
詰城戸
岡本記云城の一のきと二のきと三きと
おとゝハ一のきとハ二ハ一ハ口のゐ
このきとハ戸あのきと。あとゝ常人の
一きとの事や

一門

清正記云武州岩付ハ北条十郎氏ヨリハ
州ヲ要害堅固ニ由ニ聞及テ武不分
先ヲ責手ヲ引ク仰也則本村常陸介浅野隼
正少弼山内豆州家康内本田多井平岩以
下武万余岩付ヘ押寄即時ニ外構ヲ乗破
ル餘討捕ヲ本城一之門ヘ寄ル

三門

安土日記云天正十年正月朔日惣見寺毘
沙門堂御舞臺見物申表之御門ヨリ三之
御門之内御天主之下御白洲マテ御伺公
ニ候

詰門

毛利家記云秀元卿長束殿ヘ仰ケル ハ加
様ニ大勢ノ者徒ニ可居ヲ不可然不日ニ
津ノ城ヲ攻給ヘト于九月廿四日ニ津ノ

城ヘ押懸給フト即時南ノ方追手ノ橋ノ
ツメノ門ヲ押破リ込入ケレハ二ノ丸ヘ
込入門ヲ立レヲ追續キ二ノ丸ノ堀ヲ乗
越云々

二階門

甲陽軍鑑云内藤喜田兵小田原冨の手あ
そこを作り信玄公御旗本ハたい嶋森の
内ニ備を立ちらし滝山の城之のくるゝを

せめちらす陸奥ハ二のくるゝと二階門へ
あらりさいをとりて爰を宿と
防ちらし

甲陽軍鑑末書云信玄公御旗本ハハイ嶋
森ノ内ニ備ヲ立テル、滝山ノ三ノクル
輪ヲ攻チラシ陸奥守ニノクル輪三階門
ヘアカリ再拜取テ爰ヲ最期トヽケル

太閤記云因幡国鳥取落城条附城之法善院ハ七月

翌日より鉄砲者しらすなどハ大や橋櫓
二階門ハ等て出来ハ
續武家閑談云秀吉御下知を以て三月十九日
(六、三十三ヨリ五カ)
已に刻ニより先鋒の諸將箱根のこなたより
仕寄道具をこ嶋乃陣より取寄々る中男門
脇を押破るこ丸へ押込取城兵二の丸へと
引ゝ市ハ則附入ハ せんと勘兵衛ハ
二丸へ寄ハ ハ十間半のらんらん櫓あ

るこれを敵味方入交て押込ゆく二階門丈ハ
ハ構へくれとも立させて無迄平地
見聞雜録云北條陸奥ハ二の廓を責破
ら手二の廓二階門へ上り乗配して聲を拍
り笑を笑物と防ハと兵根をよるも笑て神や
黒門
增補家忠日記云慶長十九年十月十九日
藤堂高虎進テ天王寺口城ノ黒門ニ向ヒ

陣ス城兵大野主馬助木村長門守是守ル

黒鐵門

水野勝成記云拙者をのせり合ゆそろかゝの門まゝ押込ゆ儀のゆゝ事ハおかちもゝろくきの門丑つきいゝ

埋門

氏郷記云小田原軍條町野輪承夜ハ忍ヒテ案内ヲ見ケルカ其夜モ忍ヒテ埋門ヨテ行ヒニ敵ノ大勢ヒシ〻〻ト用意メ早氏郷ノ陣ハ切テ懸ラン人数ヲ押出シケレハ云々

関八州古戰録云太田氏房二度目夜討條蒲生氏郷ノ伊賀ノ者町田輪之丞トテ忍ヒノ骨張サリシカ其夜ノ子刻計ニ氏房ノ持口ノ埋門ニ付テ城中ヲ伺ヒケレハ云々

廊下門

甲陽軍鑑云勝頼公甲府を出立あり東上
州へ打出大湖山上ぜんあんと申順見あさう
あり則申順見乃次同城をも申攻なさる
キ事を各侍大将相小籠ハりもうせ
諸勢をはさまれ申侍仕る処よぜんの城よ
り足軽を出し上原安中元とも合と申云
勝頼公仰られ候つる諸勢を城きハへ居き
殊ニ土屋右衛門尉ハ居き上あ元の門ハ居き上あ元

おもをたしうる處を土屋元服又市
と申若者おもを城あ元廊下門たしなる
甲陽軍鑑末書云土屋衆一宮左太夫ト云
者鑓一丁ニテ城内ノ鑓六本ト廊下門ニ
テワキ合フ後ハ左太夫叶マレ引ヘキト
云又市申ハ爰ヲ去以来出家ニ成ヘクハ
存セス又市ニ於テハ去マレキト申ニヨ
リ一宮モ立サウ然ル所ニ六条殿衆ニ

浅美清太夫堀無手右衛門中根七右衛門
三人走来テ脇又市同前ニ一宮左太夫鑓
服ニカニテコタヘル云〻

上鎖門

甲陽軍鑑云花房彼門服ハ五人つきしる元
也四郎勝頼公長坂長閑名和無理介諏訪
越中初鹿伯左衛門や彼かあき鎖子を無理
かあ者ゆ也よと初鹿伯左衛門中ハ一を矢狭間
ちけくしてあ者らうをあてあ丶と無理
介接拵やてとまて伯左衛門主あ〻見諏訪
を押上る諏訪越中つゝをけうをちさ
るかを鎖をもつて防き伯者と内中男越中
伯左衛門今の鎖徒をとうく内る
小野勝成記云伊豆忠左衛門平主事を小あい
ふ門いたれ丶たいらつゝ彼まてかゝつ町口れ
しやうあげちやうゝ門二ゝ者へ四屋文

透門

十五

甲陽軍鑑云城取の事中一門ぢふくの事

一門とは同苗(ちがうまゝ)なるを同苗(ちがうまゝ)なるを

籠門

籠輪軍記云柿崎城攻城戦ためとて支城名

山の尾崎城切築き城の南表を籠に似

多る迄なりと名付き名城なれハ皆国に

なれ為もかゝるか況や籠城の面

上杉傳代の舊臣なりて名誉(それ)は一騎当千の侍

や甲軍多勢若干鉄炮ありて打殺されて近

きハ矢ゝ打籠門に近付者ハ弓鉄放

し延掛塀際者を鉄まて控居しなり

柵門

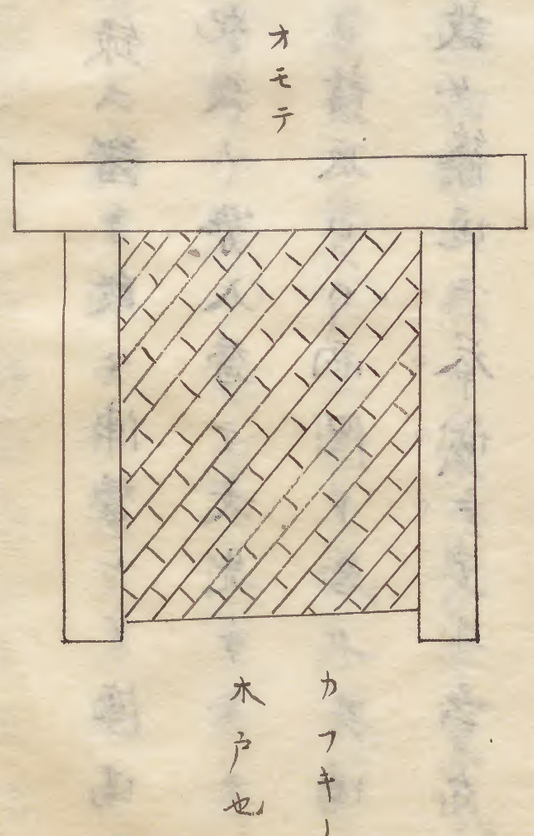
武蔭叢話云十月八日ハ城代小西隼人ハ腰

して字上ノ城居去真砂小西家大方陣ら

す清正抱ついに杉本治部助を呼先月廿一日

の夜討の時柵門すて兵方と銭伐合たる
とて吉あり光へ入るに入れたと等ぶら杉本
あり引口の時近かの時一人付来り非張
の貴戸口迄来り夜故拵右立六角へ銭を
合十文字まて彼の者此方の腕をかけ
戸を立て住り夜面木戸を打夜明乃
ちハ十文字此鎌ま血付色あり是もの
ハ其間ないの甲ふ毛の馬然の引也

付て重銭をおいと云則田中兵助や
冠木城戸
築成記



揚城戸

平塞録云諸手段々陣替レテ陣場定リケレハ肥後ノ勢入替テ大先手トナル肥後一手ノ請取口ハ両口ト名ノ其場ニ内虎モ落リヲ設ケ篠垣ニ拳城戸アリ云々

揚簀戸

太閤記云利家未森之城後攻条いくとハ云こうもん三丸外構乃揚簀戸をおろさ引ハ引ては

敵ハ引かゝ引て来ル手を野場孫介因ヶ左ヱ門ヶ左ヱ門引返し後を合

會津陣物語云然ル處ヘ長谷黨城ヨリ悉甲八百余上簀戸ヲ開キ城外ヘ打テ出カノ湖ヲ渉テ懸リ来ル直江カ軍兵トモヒメ〳〵ト鑓ヲ卧テ相懸リニ進ム

釘戸

結城戦場物語云箱根山と中ハ前に水海
をかまへ西方地山場をとそひえたり
中に岩をかさま屏風をたてくるりとなし
矢倉をいたてうきたなりに釘をさしもき
鞠要石をもうけてよせてをそれと為
うけとり

栫戸張

由良家傳記云義成の田城時新田に北条氏
働をはけ木を押立成を渡し石垣にて
國繁顕長をたのはけ戸張なる中ハ中
妙戸板あを延教也と成下知を成ハ成
木戸張成開き内より二三百人にてそ
と実て出ハ北条氏敗軍仕る

大戸張

小戸張

常陸國岩藏院文書云氏康當他へ彼取急

附る急度戸札畏入存ぬ仍去二日巳刻より家来
小田宮ゟ外ゟ出人数いし処左源治先発打
ゟ家ゟ熱野伏り家民康備前迄引色い午刻
民康父子取手銭ゟ家来いる殺打者之内へ
引入大戸張小戸張新曲輪自三戸張切之
出新宮迄捕出ゟ敵手負死人数多い条用
害廻ニ石垣陣取号中戸和五里半引除
陣取ゟ明三日一ノ可令出行之由存ゟ処

夜中退散無念此事ゟ何様ゟ尋之ゟ札自
拙者可奉答依為ゟ諸云三月七日佐竹度
ゟ報中賀入道晴助花押

門隠

太閤記云山中之城渡邊三の丸門ゟくぐりに
相除上簀戸有ゟ在入ゟ世ゟ欲ゟ
見ゟ女手前老人ゟ者又ハ命ゟと左
ゟ傍ゟ多く鉄炮をかけゟハ右ハ

ものらひいき、

外形

甲陽軍鑑云、すかゝ幸盛八とたちの事

但大将の御寄せ五八をもつてを門前を

外形とゝゝ口侍有

又云山本勘助先ゝ、すかゝ侍俄を多く

上ゝゝゝゝ、馬侍四十騎のさゝを安宅

太閤記云名護屋旅館作事条二ゝ九南ゝ門三ゝ七ゝ龍野

侍従因外形七ゝ四方石垣四因人

武者溜

小畠景憲家譜云伏見退ゝ治部少輔曲輪

武者溜り陣取ゝ人ゝゝ可有ゝ佐和山

為人数不来ゝも正ゝゝゝ八餘和ゝ三万ゝ

向ひ夜ハ夜ゝ屋ハ物見を出ゝゝゝ

續機清正記云書頃八幡の國と云やゝと(ところ)伐

下ゝ様ゝの陣屋所ゝ武者溜ゝ

御進状をいたし其状の後ニ哥舞妓をし
て家来の諸侍に銀子一枚宛出し桟敷
をかけて見物し地下町人も八木を持来て
鼠戸の口より入て芝居にて芸を見る
此國の哥舞妓乃始なり

勢溜

十八
大友興廃記云 薩州臼杵 廿五条 城中乃諸勢一勢
々先手に勢ぞろへ又一をいたし平清水口に
ひかへたり薩州勢備ハ上とんせん抱へく
たへず押寄ることに残りて溜りしまりたると云々
築城記云平城ハ城ノウシロニ勢溜リ有様
ニ可構や

馬溜

甲陽軍鑑云一馬たまりの事一門扉ひと
かまへの事一門たゞよく作事

馬出

七 甲陽軍鑑云勘介ト上る馬。生。ト申ス
城之の眼まくいこ細ゝ城を引き立て城
内より仮を出すべ。あけ元ゝ及
又攻手より成ゝくゝ元よりくゝ

八 甲陽軍鑑末書云花澤落城ヲ聞藤沢德ノ
一色明テ退是ハ堅固ノ地也トテ馬場美
濃守ニ被仰付馬。出ントテ田中ノ城ト
名付テ暫番手持也

角馬出

九 馬出

十五 甲陽軍鑑云。すゝ馬。だ。ノ事ハ
ヒの事一ヒとらけ北城内せ。ノ一。
馬。た。ノ。ノ事一ヒるるるぶ。ノ之るノか
き口俗大極之有り
見聞雜録云花沢城ハ内藤校之俗も
小原肥前守カ之者也番手差免ル所無明

々退信云々古馬を被為乗候様子今川了俊之縄張之中ゝ異国之地之ゟ去者
成之馬出古風ゟて角馬出也不宜と存て
馬場兵庫ゟ成兵被仰ハ兵方仕馬出ゝを
異国仕而出ゝ之儀心得之
るゝと仰之や馬場兵庫ゟ上ハ山本勘助
委敷借ゝ仰丸馬出ゝ長三間之位之極
異遠ゟ使ゝ有心ゝ此成ハ佛之辻之馬

出ゝも仰付ゝ遣可申上と
大友真庵記云 新城戸取之儀 吉日良辰を
ゝて成取あひまゝ法下ゝを田ゟ
のくまらくものゝ方ゝよこくなて
かさしの土手ならゝ北ゝ角馬いゝ
とゝたの矢蔵庵向横矢の分別ゝ有之
へき所ゝ見ゝ申ゝ
築地馬出

辻馬出

甲陽軍鑑云勘介承て上る云と書付とり
て走る城に拵すべき処仕を行りて築
すべき処又土居をつき柵乃木乃塀ふ屋
をゝ節乃土居うゝ北土居櫓階
廊下楯の人馬乃ふ浄らくすなゝ
流ふ方乃馬ゝ五方六方八方四面ゝん
出ゝ甲も存ゝる者無之

甲陽軍鑑云信玄ふ家中城取極を五ツ
ゝ辻乃馬出ゝ云ゝ

見付

續武家閑談内義家傳云元亀元年十月
中旬信玄遠州へ発向ゝ乾の天野宮田
右ゝ筆内にて飯田の城を明渡そのる
見付の表へ信玄旗を立ゝ東西宮北
四拾三千餘騎一云仮にて合戦そ

武家名目抄稿　廿五冊

国立公文書館
National Archives of Japan

明治十五年五月廿九日校合了　小野由久

同年六月四日再校　共書　水上昌言

同年同月六日以旧稿校正加朱點了　數原尚樹

同月七日再校成

宮書局文庫

明治十六年五月

校合　鈴木行一

宮内省

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan